



■ フォト・エッセイ ■

コロンボの夜—スリランカ—

写真・文
エリック・レヒシュタイナー
Eric Rechsteiner

デヴォルマドゥの踊り、コロンボ近郊マディンナゴダにて。踊り手

スリランカの大都市コロンボの街中は公害で空気が汚れ、どこも乱雑に散らかったように車とオート三輪であふれている。無個性な幾つかの高層ビルが海沿いに立ち並び、だだっ広い公道は彼方の郊外に向かつて一直線に終りなく延びている。この街を徒歩で回るのは冒険に値する。

それにコロンボは客に無愛想な街との評判で、ここに観光客が留まることはまずなく、彼らは到着するやいなや南の海岸かキヤンデイ周辺の清々しい聖なる山地へと立ち去って行くのが常である。

街中で唯一、ベッターという古い界限だけはかろうじて魅力といえるものを保っている。ここでは何世代にもわたってムスリム、キリスト教徒、仏教徒シンハラ人、ヒンドゥ教徒タミル人が肩を並べて生活しており、平穏なこの場所にいるとこの国が二〇年来血に染まる激しい民族紛争下にあることを忘れてしまいそうになる。

東京からある晩初めてコロンボに降り立った者にとってまず何よりも驚きなのは、この街を覆う夜の深淵である。どこも暗い。公共の電燈も少なく、日本の大都市を毎夜こうこうと照らし出すネオンの光とは対照的である。一種不気味な雰囲気漂い、薄明かりの中で街は完全に寝静まりほとんど死んでいるかのようである。

しかしこの初めの印象はうわべだけのものであった。太陽に感覚が摩耗されている



コロomboの宗教行列。象の行進



コロomboの宗教行列。軽業師



コロombo近郊マディナゴダにて。幼い参列者

かのような旧セイロン島の都市に数日間でもいたら、それを納得するには十分である。ある早朝、まだ日が昇る前の暗闇の中、ずくような呪文、訴えかけるような歌声とミステリアスに低くうなる音楽、街の奥底から沸き起こる喧騒とでもいったもので目が覚め、その時私はコロomboの街が実は夜に属することを知ったのだ。

太陽から立ちのぼる白いもやの中では打ちのめされ、黒々とした視線が茶碗の水面に固着したまま人々は無気力であるが、夜の黒いもやの中ですべてが活気づくのを見るべきなのだ！

ある夜、太鼓の強い唸りに引き寄せられて近づいていったところ、突如目の前どころからともなく現れ出た宗教行列。魔法にでもかけられたか一瞬息を呑んだ。松明を掲げた優雅な若い男性達が先頭を切り、華やかな衣装の踊り手、曲芸師、太鼓に支えられた音楽隊がそれに続き、その後を豪華な色とりどりの布飾りをまとった何頭もの壮麗な象が行く。怪し気な仮面を付けた踊り手、多くの仏陀像も含むこの一団は、全長を松明の光に照らされながら仏教寺の回りをぐるぐると回る。

そのただならぬ壮大さについて住民の一人に尋ねたところ、返事は素っ気なく、何ということはない。他のもつと大きな祭礼の時には象が数百頭にも及ぶとのことだった。スリランカにいとと言われる三三〇億の神。そのうちの幾つかにはお目にかか



デヴォルマドウの踊り。トランスに入った踊り手



デヴォルマドウの踊り、コロンボ近郊マディンナゴダにて。打楽器奏者



デヴォルマドウの踊り、コロンボ近郊マディンナゴダにて。松明を持った踊り手

れるかもとの思いがあったとはいえ、このような活気と火に満ちた光景とは考えてもいなかった。

別の晩、島で最も高尚とされるキャンデイの踊りと打楽器の偉大な師、パニバラタ氏の八五歳を祝う祭りに招かれた。コロンボの落ち着いた静かな郊外のある仏教寺院の敷地内に竹を使った一種の舞台が設置されており、そのすそに平然と構えた師を囲んであらゆる年齢と条件の人が集まっている。それが儀式の場で、それから何時間かにわたって太鼓のリズムに支えられ、降り注ぐ火に伴われた離れ業的な超絶技巧のデヴォルマドウの踊りと音楽は続いた。

これは繁栄を呼び、伝染病を退けるために万神殿に働きかけて神を崇める典礼なのである。

夜が更け、数時間に及ぶ息を呑む祭礼の後で人々は疲れから寝入りそうできえあつたのだが、その時赤い衣装に風変わりな尖った帽子を身に着けた踊り手の一人が控えめに小さく不規則な足の動きを見せはじめた。初めはかなりゆつくりと、単調な打楽器の音に伴われ、それが徐々に速まっていくなにつれ踊りも激しさを増し、しまいには機械的な動きにまで達した時、私はこの祭事の最大の山場の時が目覚めるのを感じた。激しさが増し、その時何かが起こっていた。一瞬の後、恐怖をかき立てる太鼓の鳴り響く中、口元に泡を吐き、気の狂った独楽のように自らの回りをぐるぐると回りな



デヴォルマドゥの踊り、コロombo近郊マディンナゴダにて。トランス状態の後で倒れた踊り手（仲間に付き添われながら儀式の最後を執り行った後、力尽きた踊り手は気を失って地に倒れた）



デヴォルマドゥの踊り。トランスに入った踊り手



コロombo近郊マディンナゴダにて。夜明け時の最後の儀式



がら、このか細い踊り手は乗り移りと化していた。

この夜、我々から悪を取り除く役割を担っていたのはこの踊り手だったのだ。トランス状態に入りこの場の全ての厄を身に集め炎の中に消し去るべく、狂ったように回り続け人々を遠のかせながらも踊り手は火の粉を四方の風向きに巻き散らした。

仲間に付き添われ、乗り移ったまま儀式の最後を執り行った後、力尽きた踊り手は気を失って地に倒れた。夜が明けたのはちよどその時だった。

この長く強烈な一夜で呆然とし疲れきった私は、ようやく初めてこの街の本当のリズムを身をもって取り入れることができたのだ。太陽を避けて日中寝て過ごし、目を見張るような光り輝く新たな夜に備えるというわけだ。

（エリック・レヒシュタイナー／写真家）